

上野殿御返事

弘安二年四月二〇日 五十八歳

抑 ^{そもそも}日蓮種々の大難の中には、^{たつ}竜の口^{くち}の頸^{くび}の座^{とうじょう}と東条^{とうじょう}の難にはすぎず。其の故は諸難の中には命をすつる程の大難はなきなり。或は^馬のり、^責せめ、或は処をおわれ、無実を云ひつけられ、或は^{おもて}面^打をうたれしなどは物のかずならず。されば色心の二法よりをこりて^誹そしられたる者は、日本国の中には日蓮一人なり。ただし、ありとも法華經の故にはあらし。さてもさてもわすれざる事は、^少せうぼう^輔が法華經の第五の巻を取りて日蓮が^面つらをうちし事は、三毒よりをこる^打処^擲のちやうちやくなり。

天竺^{てんじく}に嫉妬^{しつと}の女人あり。男をにくむ故に、家内の物をことごとく^{かない}打ちやぶり、其の上にあまりの^{はらだち}腹立^姿にや、^氣すがた^色けしきかわり、眼は日月の光のごとくかがやき、くちは炎をはくがごとし。すがたは青鬼・赤鬼のごとくにて、^{としごろ}年来男のよみ奉る法華經の第五の巻をとり、^散両の足^散にてさむざむにふみける。其の後命つきて地獄^墮にを^入つ。両の足ばかり地獄にいら^入ず。獄卒鉄杖をもつてうてどもいら^入ず。是は法華經をふみし逆縁の功德による。今日蓮をにくむ故に、せうぼうが第五の巻を取りて予が^面をもてをうつ、是も逆縁となるべきか。彼は天竺此は日本、かれは女人これは^男をとこ、かれは^足両のあしこれは^同両の手、彼は嫉妬の故此は法華經の御故なり。されども法華經の第五の巻は^同をなじきなり。彼の女人のあし地獄に入らざらん、此の^{むけん}両の手無間に入るべきや。ただし彼は男をにくみて法華經をばにくまず。此は法華經と日蓮とをにくむなれば一身無間に入るべし。經に云はく「其の人命終して阿鼻獄に入らん」云云。手ばかり無間に入るまじとは見へず、^{ふびん}不便なり不便なり。ついには日蓮にあひて^憎仏果をうべきか。不輕菩薩の上慢の四衆のごとし。

夫^{それ}第五の巻は一經第一の肝心なり。竜女が^明即身成仏あきらかなり。提婆はこころの成仏をあらはし、竜女は身の成仏をあらはす。一代に^{ぶんた}分絶へたる法門なり。さてこそ伝教大師は法華經の一切經に超過して勝れたる事を十あつめ給ひたる中に、即身成仏化導勝とは此の事なり。此の法門は天台宗の最要にして^明即身成仏義と申して文句の義科なり。真言・天台の両宗の相論なり。竜女が成仏も法華經の功力なり。文殊師利菩薩は「唯常宣説妙法華經」とこそかたらせ給へ。唯常の二字は八字の中の肝要なり。^{ぼだいしんろん}菩提心論の「唯真言法中」の唯の字と、今の唯の字といづれを本とすべきや。彼の唯の字は^恐をそらくはあやまりなり。無量義經に云はく「四十余年未だ真実を顯はさず」と。法華經に云はく

「世尊の法久しくして後かなら要ず当に眞実を説きたまふべし」と。多宝仏は「皆是眞実なり」とて、法華經にかぎりて即身成仏ありとさだめ給へり。爾前經にいかやうに成仏ありともとけ、權宗の人々無量にいひくるふとも、ただぼうろく干につち一つなるべし。「法華折伏破權門理」とはこれなり。尤もつともいみじく秘奥なる法門なり。又天台の学者、慈覺よりこのかた玄・文・止の三大部の文をとかくれうけんし義理をかまうとも、去年の曆こよみ昨日の食のごとし。今日今日の用にならず。末法の始めの五百年に、法華經の題目をはなれて成仏ありといふ人は、仏説なりとも用ゆべからず。何に況んや人師の義をや。爰に日蓮思ふやう、提婆品を案ずるに提婆は釈迦如来の昔の師なり。昔の師は今の弟子なり。今の弟子はむかしの師なり。古今能所不二にして法華の深意をあらはす。されば悪逆の達多には慈悲の釈迦如来、師となり、愚癡の竜女には智慧の文殊、師となり、文殊・釈迦如来にも日蓮を劣とり奉るべからざるか。日本国の男は提婆がごとく、女は竜女にあひ似たり。逆順ともに成仏を期すべきなり。是提婆品の意なり。

次に勸持品に八十万億那由他の菩薩の異口同音の二十行の偈は日蓮一人よめり。誰か出でて日本国・唐土・天竺三国にして、仏の滅後によみたる人やある。又我よみたりとなのべき人なし。又あるべしとも覺へず。「及加刀杖」の刀杖の二字の中に、もし杖の字にあう人はあるべし。刀の字にあひ聞たる人をきかず。不輕菩薩は「杖木瓦石」と見へたれば杖の字にあひぬ、刀の難はきかず。天台・妙樂・伝教等は「刀杖不加」と見へたれば是又欠かけたり。日蓮は刀杖の二字ともにあひぬ。剃あまつさへ刀の難は前に申すがごとく東条の松原と竜の口となり。一度もあう人なきなり。日蓮は二度あひぬ。杖の難には、すでにせうばうにつら少輔房をうたれしかども、第五の巻をもてうつ。うつ杖も第五の巻、うたるべしと云ふ經文も五の巻、不思議なる未来記の經文なり。さればせうばうに、日蓮数十人の中にしてうたれし時の心中には、法華經の故とはをもへども、いまだ凡夫なれば無情うたてかりける間、つえをもう奪ばひ、ちからあるならば、ふみ踏折捨をりすつべきことぞかし。然れどもつえは法華經の五の巻にてまします。

いま思出をもひいでたる事あり。子を思ふ故にや、を親機やつきの木の弓をもて、学文せざりし子に教をしへたり。然る間此の子うたてかりしは父、にくかりしはつきの木の弓。されども終には修学増進して自身得脱をきわめ、又人を利益する身となり、立ち還って見れば、つきの木をもて我をうちし故なり。此の子卒塔婆そとばに此の木をつくり、父の供養のためたて、てむけり建手向と見へたり。日蓮も又かくの如くあるべきか。日蓮仏果を得えむに争いかでかせうばうが恩を少輔房すつべきや。何に況んや法華經の御恩の杖をや。かくの如く思ひつ

づけ候へば感^押涙をさへがたし。

又涌出品は日蓮がためにはす^少こしよしみある品なり。其の故は上行菩薩等の末法に出現して、南無妙法蓮華經の五字を弘むべしと見へたり。しかるに先づ日蓮一人出来ず。六万恒沙の菩薩よりさだめて忠賞^蒙をかほるべしと思へばたのもしき事なり。とにかくに法華經に身をまかせ信ぜさせ給へ。殿一人にかざるべからず。信心をすすめ給ひて、過去の父母等をすく^救わせ給へ。日蓮生まれし時よりいまに一日片時もこころやすき事はなし。此の法華經の題目を弘めんと思ふばかりなり。

相かまへて相かまへて、自他の生死はしらねども、御臨終のきざみ、生死の中間に、日蓮かならずむ^迎かいにまいり候べし。三世の諸仏の成道は、ねうしの^{子 丑 終 寅 刻}をはりとらのきざみの成道なり。仏法の住処は鬼門の方に三国ともにたつなり。此等は相承の法門なるべし。委しくは又々申すべく候。恐々謹言。

卯月二十日

日 蓮 花 押

上野殿御返事

か^餓つへて食をねがひ、渴^{かつ}して水をしたうがごとく、恋て人を見たきがごとく、病にくずりをたのむがごとく、みめか^{形 容}たちよき人、べにし^紅ろいものをつくるがごとく、法華經には信心をいたさせ給へ。さなくしては後悔あるべし云云。